都市と周辺地域とのつながりにおけるアンカラ

ヒュリヤー・タシュ
（齋藤優子訳）

都市とその周辺地域の住民論という視点での検討は、二つの観点から行うことが可能である。第一に、ある一定の時代の条件内で定住単位の大きさ、それ自体からであり、二つ目は、都市とその周辺地域が担う機能的観点における他の地域との関係である。この報告においては、オスマン朝時代のアンカラについて検討する。まず、初めに断っておくが、オスマン朝時代といえても六〇〇年間という期間が、その全体を通して共通する特徴を示すわけではないためである。私自身の研究が一七世紀のアンカラと関連していることから、特にこの一七世紀という時代に焦点をあてることとする。一七世紀というこの時期には、周知のとおり産業革命以前の時代であり、この時代の技術の最も基本となる特徴は、動力が人間と動物の力に頼っていたことである。

オスマン朝の組織が変化する過程で、七世紀の都市としのアンカラは、初めはアンカラ県（sancağı）の中心地であり、さらにこのアンカラ県にあたる同名の郡（kaza）の中心でもあった。詳者注 sancağı と kaza の名称はその郡や郡の中心地の名で呼ばれる。オスマン朝の行政区画では、国（tilka）、州（gülte），国内部にあたる郡に分けられていた。この地方行政区画は、「軍事制度 askeri idari」との関連にし
史苑（第七〇巻第一号）

アヤシュの首長であるアンカラが配置された県の中心地であり、それ以降は州の中心地がキユーフヤに移動されたため単純な県との機能をもつのみとなり、一九世紀に新しく整備されるまで、この特徴を保ち続けている。我々が調査した時代において、行政区分の観点からアンカラが県郡制度化される上で大きな違いは見られなかった。つまり、アンカラは、県に付属するアヤシュ（Ayas）、シュフブ（Cuhuk）、ムラタ（Murtazaib）、ムルタバ（Murhabal）で構成されている。また、この状態は司法行政による区分となっても、アンカラ県の組織化は一九世紀を通じて九つのイスラーム法による管轄区域に分割された。これらの九つのイスラーム法による管轄区域は、アンカラ（Ankara）、チューブック（Cuhuk）、ムルタバ（Murhabal）、ヤシュペジュ（Yoruk）で構成されている。最後の一つであるヤシュペジュは、十九世紀を通じて九つのイスラーム法による管轄区域に分割された。これらの九つのイスラーム法による管轄区域は、アンカラ（Ankara）、チューブック（Cuhuk）、ムルタバ（Murhabal）、ヤシュペジュ（Yoruk）で構成されている。最後の一つであるヤシュペジュは、十九世紀を通じて九つのイスラーム法による管轄区域に分割された。これらの九つのイスラーム法による管轄区域は、アンカラ（Ankara）、チューブック（Cuhuk）、ムルタバ（Murhabal）、ヤシュペジュ（Yoruk）で構成されている。最後の一つであるヤシュペジュは、十九世紀を通じて九つのイスラーム法による管轄区域に分割された。これらの九つのイスラーム法による管轄区域は、アンカラ（Ankara）、チューブック（Cuhuk）、ムルタバ（Murhabal）、ヤシュペジュ（Yoruk）で構成されている。最後の一つであるヤシュペジュは、十九世紀を通じて九つのイスラーム法による管轄区域に分割された。これらの九つのイスラーム法による管轄区域は、アンカラ（Ankara）、チューブック（Cuhuk）、ムルタバ（Murhabal）、ヤシュペジュ（Yoruk）で構成されている。最後の一つであるヤシュペジュは、十九世紀を通じて九つのイスラーム法による管轄区域に分割された。これらの九つのイスラーム法による管轄区域は、アンカラ（Ankara）、チューブック（Cuhuk）、ムルタバ（Murhabal）、ヤシュペジュ（Yoruk）で構成されている。最後の一つであるヤシュペジュは、十九世紀を通じて九つのイスラーム法による管轄区域に分割された。これらの九つのイスラーム法による管轄区域は、アンカラ（Ankara）、チューブック（Cuhuk）、ムルタバ（Murhabal）、ヤシュペジュ（Yoruk）で構成されている。最後の一つであるヤシュペジュは、十九世紀を通じて九つのイスラーム法による管轄区域に分割された。これらの九つのイスラーム法による管轄区域は、アンカラ（Ankara）、チューブック（Cuhuk）、ムルタバ（Murhabal）、ヤシュペジュ（Yoruk）で構成されている。最後の一つであるヤシュペジュは、十九世紀を通じて九つのイスラーム法による管轄区域に分割された。これらの九つのイスラーム法による管轄区域は、アンカラ（Ankara）、チューブック（Cuhuk）、ムルタバ（Murhabal）、ヤシュペジュ（Yoruk）で構成されている。最後の一つであるヤシュペジュは、十九世紀を通じて九つのイスラーム法による管轄区域に分割された。これらの九つのイスラーム法による管轄区域は、アンカラ（Ankara）、チューブック（Cuhuk）、ムルタバ（Murhabal）、ヤシュペジュ（Yoruk）で構成されている。最後の一つであるヤシュペジュは、十九世紀を通じて九つのイスラーム法による管轄区域に分割された。これらの九つのイスラーム法による管轄区域は、アンカラ（Ankara）、チューブック（Cuhuk）、ムルタバ（Murhabal）、ヤシュペジュ（Yoruk）で構成されている。最後の一つであるヤシュペジュは、十九世紀を通じて九つのイスラーム法による管轄区域に分割された。これらの九つのイスラーム法による管轄区域は、アンカラ（Ankara）、チューブック（Cuhuk）、ムルタバ（Murhabal）、ヤシュペジュ（Yoruk）で構成されている。最後の一つであるヤシュペジュは、十九世紀を通じて九つのイスラーム法による管轄区域に分割された。これらの九つのイスラーム法による管轄区域は、アンカラ（Ankara）、チューブック（Cuhuk）、ムルタバ（Murhabal）、ヤシュペジュ（Yoruk）で構成されている。最後の一つであるヤシュペジュは、十九世紀を通じて九つのイスラーム法による管轄区域に分割された。これらの九つのイスラーム法による管轄区域は、アンカラ（Ankara）、チューブック（Cuhuk）、ムルタバ（Murhabal）、ヤシュペジュ（Yoruk）で構成されている。最後の一つであるヤシュペジュは、十九世紀を通じて九つのイスラーム法による管轄区域に分割された。これらの九つのイスラーム法による管轄区域は、アンカラ（Ankara）、チューブック（Cuhuk）、ムルタバ（Murhabal）、ヤシュペジュ（Yoruk）で構成されている。最後の一つであるヤシュペジュは、十九世紀を通じて九つのイスラーム法による管轄区域に分割された。これらの九つのイスラーム法による管轄区域は、アンカラ（Ankara）、チューブック（Cuhuk）、ムルタバ（Murhabal）、ヤシュペジュ（Yoruk）で構成されている。最後の一つであるヤシュペジュは、十九世紀を通じて九つのイスラーム法による管轄区域に分割された。これらの九つのイスラーム法による管轄区域は、アンカ
都市と周辺地域とのつながりにおけるアンカラ（ヒューリ）

ク・アヤシュ・ヤバナバードであった。アンカラは一七世紀
以前もこれまでに言及してきた一七世紀における中心地であり、そ
して同様にアンカラの名で知られる郡の中心地でもあった。
アンカラの周辺にはムルタザバード、ヨルルバ、チュク
ルジャク、ペジュ、ヨリュク（Yorük）までは前期の遊牧
民のアンカラの略、ヨルディク（Yorük）という郡名があっ
た。これには多くの部が含まれていたが、時には一部
の郡が別に独立してのイスラーム法管区を示したことであ
り、それぞれの役割をもつ郡の共通の特徴は、
定置のイスラーム法管区の管轄以外に、遊牧民のイスラ
ーム法管区を示すことを目的に、それぞれの経済区域内で中心
区には大きく二つ、一つは独立したイスラーム法管区を示すことが
できないごく小さな村、村、郡、遊牧民間の地（Yorük Cemaat, Yorük）と
して記録に残された定住地があった。そのためイスラーム
法管区の役割は、一定の場所に居住させ、統治区域内
にいる者たちを巡回しながらその任務を遂行していたと考え
られる。一方では、もはやそれを目的とする郡役所呼ばれ
るとおり、まさに遊牧民のためのイスラーム法管区であっ
た。これは、前記した遊牧民がなぜ毎年この地域を訪れたか
という理由で、イスラーム法管区の役割はその目的を持つ
郡役所と比べてはるかに重要であると言える。

これまで述べてきたようにアンカラ県は、元々農業大国
の土地を基礎にして築かれた県であり、その内部で農
業活動以外に分業手業によって生産活動が行われた町と
市がある。アンカラ市は一七世紀に築かれた町であっ
た。その中心地がアンカラだったのである。そのため、県内
内の町で多くがアンカラに集中していた。アンカラ以外に先ほ
どのちょっとした郡役所を持つ地域を除くと、ほとんどが広
く含まれている。アンカラは、このため当該地域の最も
重要な行政都市であっ
た。そして県の中心地であり、その役
務をも含めて大きな郡でもあった。そのため当該地域の
の関連も、このような状況と同時に体液し
ていく中でアンカラの重要性はさらに増し、当該地域のみ

- 34 -
二中距離地域との関連
ソフの生産とその取引

アンカラの広い地域内で中程度の距離をおく地域との関連を明らかにする活動は、ソフの生産と取引である。ソフは、現在私たちの知っている言葉で言うならば、ムクタ（mukta）であった。この点について、次の項でより明らかにしていくと思う。

ムカーターは、最も一般的な意味ではこのように説明することができる。ソフと呼ばれる穀物は、最終段階の加工がアンカラで行われ、飲出しされていた。また、穀物を染色するための染色小屋もアンカラにあった。そのために、地元とそれ以外の商人たちが穀物をアンカラで買い上げ、その谷物を染色した後、地元とそれ以外の場所へ運んでいった。当該地域で生産された穀物がアンカラで販売され、税金を徴収する機会を与えた。税金から穀物を徴収するための証明として押された印は穀物等証明の中でもソフと呼ばれて通用していた。
三
遠距離地域との関連…ソフの生産とその取引

ソフの特徴は、幅広い用途で使用できる繊維であった。ソフの生産は、遠距離地域で行われており、特に富裕層の間で使用される傾向が見られた。ソフの繊維は、耐久性と柔軟性が特徴であり、様々な用途に使用された。例えば、財政管理用の台帳や、公共の施設の装飾用など、広範囲にわたる用途に使用された。また、ソフはその製品特性から、販売の際には高価格設定が行われた。
四 イスタンブールとその他の大都市との関連

宮廷をはじめとして多くの大都市で、特に上流階級の間における関連は、広大なオスマン朝においてイスタンブールをはじめとする国内の遠隔地域や、国外地域との関連についてという主な二つの点に触れた。そこで、

商業上の取引関係を築く理由となった。この関係がどの程度のソフの需要に対応するものとして送っていたことが挙げられる。これらの中では、どの色でどれだけの数、どの等級であるかを明らかにしたソフが、関税長官の仲介によって売買されることが判明していた。歴史を検討し、イスタンブールの関係が長く続く理由となっている。この関係がどの程度のソフの需要に対応するものとして送っていたことが挙げられ

例として、一八三二年八月一日にアンドラのイスラムおよびアランの関税徴収官に対して、宮廷がソフの需要に対応する勅令を送っていたことが挙げられる。この勅令は、どの色でどれだけの数、どの等級であるかを明らかにしたソフが、関税長官の仲介によって売買されることが判明していた。歴史を検討し、イスタンブールの関係が長く続く理由となっている。この関係がどの程度のソフの需要に対応するものとして送っていたことが挙げられる。
ソフの生産と取引は、一七世紀においても継続してアンカラが遠距離地域との関係を保った最も重要な要素として特徴づけられている。関税の徴収において言及された史料からもうかがうことができる。関税徴収官あるいは税務掛官たちはアンカラの遠距離地域との関係は、少なくとも一七世紀中ごろと後半の台帳史料における関税の徴収について言及されている。

一六五四年五月八日（28 Cemazye Flower 1065）付けの特許では、どの点においてどの製品からどれだけの関税をかけるのかを明らかにしつつ、ボーランド商人にとってはもってこいに述べられている。ここに注目すべき点は、一六世紀には富裕であることで知られたベネチアとイギリスの商人たちには、ボーランド商人の少ない点をもっても言及でない。その理由は、一七世紀のアンカラでともにも頻繁な取引をしていたのがボーランド商人だけであるからである。さらに史料から分かることは、以前はアンカラで見られなかったオランダ商人もまた一七世紀末以降ソフの取引により利益を求めたという点である。一八世紀初頭に入ると、ソフの取引のためアンカラにやってきたオランダ商人と、アンカラの他の地域との三つの異なる関連の中で、アンカラが一七世紀のオスマン朝において非常に重要な商業の中心地であったことは明らかであった。このために、アンカラの人口は一七世紀にはうなぎのぼりに増え、人口密度の高い都市となっていたのである。この人々、遠方からやってきたオスマ朝や外国の商人住民の在住者などで活き活きとした景観を見せていた。この状況が今日のアンカラの都市としての位置や宗教、社会、そして経済の構造に至るまで影響しているのである。
Eighth-Century Empires (1700-1820), Vol. 1
Elena Frangakis-Syril. The Commerce of Smyrna in the Byzantine and Ottoman Periods, 1400-1700,


Julius Arabius, X:III, Vyzigoda Arma, Anakia Universiteli,
AS 64: 392.

-1-
Ankara within the Context of City-Environment Relationship

by Hulya Tas

Many studies conducted on city history for many years have made comparisons between Islamic cities or Eastern Cities and Western Cities and deliberated on many discussions on a theoretical platform. The aim of this discourse is to undertake the subject from a different stance, leaving such discussions to one side and the issue emphasized here involves how cities and towns in the pre-modern era have established relations with their surroundings from the functions they have assumed. In the example of the 17th Century Ottoman Ankara we see: that the city established a three dimensional relationship with its environ from an administrative, social and economic perspective: the military - administrative and judicial relationship it has formed with its close surroundings: a relationship on an intermediate scale exceeding the sanjak's borders and thus, a long-distant relationship extending to foreign countries. The second and third dimensions are a result of the wool cloth production and trade encountered within the industrial and commercial activities of Ankara as well as bringing about a very special form of organization: The Mukâta'a organization. Thus, the discourse will undertake the three dimensional relationship of Ankara and its environs as well as make analysis's on the second and third dimensions which are not observed in every city in the light of documental data.